

教 育 委 員 会 会 議 次 第

令和2年11月26日(木) 15:30

ランチスペース

1 開 会

2 案 件

(1) 協議

協議① 『北九州市子ども読書プラン』(第4次北九州市子ども読書活動推進計画) 素案について」

(子ども図書館長)

3 閉 会

教 育 委 員 会 （ 定 例 会 ）

- 1 開催年月日 令和2年11月26日（木）
- 2 開催時間 15：30～16：40
- 3 開催場所 子ども図書館 大研修室
- 4 出席者 （教育長）田島 裕美
（教育委員）シャルマ 直美 平野 氏貞 大坪 靖直
津田 恵次郎 竹本 真実
- 5 事務局職員
教育次長 太田 清治
総務部長 松成 幹夫
教職員部長 福嶋 一也
学校支援部長 柏井 宏之
指導部長 古小路 忠生
学力・体力向上推進室長 金子 二康
総務課長 田中 真徳
企画調整課長 正平 徹二
中央図書館庶務課長 山口 奈穂子
中央図書館奉仕課長 福田 淳司
子ども図書館長 河村 信孝
- 6 書 記 総務課庶務係長 増田 真二
総 務 課 事柴 佑斗
- 7 会議の次第 別紙のとおり

教育委員会(定例会)会議録 (令和2年11月26日)

1 開 会

15:00 田島教育長が開会を宣言

2 会議録署名委員の指名

田島教育長が会議録署名委員に、シャルマ委員と津田委員を指名。

3 案 件

(1) 公開案件

協議①『北九州市子ども読書プラン』(第4次北九州市子ども読書活動推進計画)素案について

本議案の提案理由を子ども図書館長が説明。

[提案理由要旨]

新たに作成する第4次北九州市子ども読書活動推進計画の素案について、協議を行うもの。

津田委員／36の具体的な取組みを行い、多くの課題があったということがわかったと説明があったが、今回、この素案に基づいて過去の施策は無くしていく方向なのか。それともこの施策を活かしたうえで新たに行っていくのか、お聞きしたい。

中には非常にいい施策だったが、結果が出ていなかったというものもあるのではないかと思う。原因など具体的なことも併せてお聞きしたい。

子ども図書館長／今回、36施策を見直すにあたり、まず施策が統合できるものについては統合を行った。

また、時代にそぐわないものについては無くした。例えば、「ノーテレビ・ノーゲーム・読書の日」についてだが、今の子どもたちはテレビではなく動画を見ていたり、ゲームもスマートフォンでしているなど、事情が変わってきているところがあったため、時代のニーズに沿ったような形を取っていくための施策に設定し直した。

今、世の中の様々なものが電子化、デジタル化されている。学校ではタブレット端末も導入された。

そういったことを含めて時代のニーズに沿ったものを入れていくことを考えて、こういった施策を精選していった。

津田委員／今までは毎月23日に、「ノーテレビ・ノーゲーム・読書の日」を学校でも取り組んできた。実際、この「ノーテレビ・ノーゲーム」と「読書」について、今までの取組みの中で、どういったことが課題として出てきているのか、お聞きしたい。

子ども図書館長／「ノーテレビ・ノーゲーム」ということと「読書」がどう結び付くのかということが、まず課題である。読書をするのとテレビを見ないことが必ずしもイコールでは無く、どのように関連付けていくのかということとは、なかなか難しいと思っている。

それから、携帯の「10時オフ」といった運動にも取り組んできた。生徒指導の面と、それから読書を純粹にする面と、それを結び付けて考えるのは、やはり

捉え方としては難しいのではないかと考えている。読書は読書で純粹に取り組んでいったほうがいい。「ノーテレビ」などとは切り離して考えたほうが良いのではないかとも考えている。この部分は指導部とも連携しながら、考えていこうと思っている。

津田委員／私が住んでいる若松区では、「1週間、テレビを消して食事をしましょう」といった取り組みを行っているが、なかなか実践できていない家庭もあるようだと思っている。

できている家庭とできていない家庭ではいろいろな事情があるため、一概には言えないが、いずれにしろ、子どものことを考えて「この1週間はテレビを消しましょう」などと取り組みが広まっていけば、必ずではないにしろ、読書をする子どもも出てくるのではないかと考えている。

子ども図書館長／「家読」について、1つ補足したい。やはり親子で一緒に読書をするということも考えていかなければならないと思っている。

そうした意味で、3つ方向性を出している。資料にもあるように、例えば子どもの読書好きを支える大人を増やすという部分である。

読書好きの大人・家庭を増やすということは、様々な学校と連携を行い、PTA協議会も交えて、様々な取り組みをやってきている。この部分について家読をどれくらいしているか、親が本をどれくらい読んでいるのか、そういったことも今後調査を続けていきたい。

津田委員／過去の取り組みについてだが、素案の2ページ「早寝・早起き・朝ごはん・読書カード」について、保育所・幼稚園の参加数が、平成28年度は95施設、令和元年度では107施設と増えてはいる。

しかし、そもそも保育所・幼稚園の数は、認可保育所だけでも160箇所以上、幼稚園でいくと相当な数にはなる。

そこに乖離があるので、しっかりと協力が得られれば、もっと大きな流れになっていくのではないかと思うが、何か協力が得られない背景などがあるのか。

子ども図書館長／多くの施設では協力いただいている。リーフレットなどの配布なども積極的に行っている。

我々としてもこれを配りっぱなしではなく、どの程度、各園で活用しているのかということ調査している。

子どもたちがどれくらい実行したのか、数もわかってきているが、それを順位付けするわけではないのだが「この子は幼稚園でよく頑張りましたよ」というような表彰を行っている。

そうすると、幼稚園から「表彰を行うと、順序付けされているようで、園としては困る」といった意見が出てきている。「幼稚園同士の競争のように見えてしまうため、いかがなものか」という意見も正直なところいただいていた。

しかし、概ね「表彰していただけてありがたい」などといった、肯定的な評価を幼稚園からいただいている。

そういったところを、我々としても全園にアピールして、増やしていきたいと考えている。

津田委員／確認だが、先ほど言ったように、認可保育所だけでも大体160ぐらいあり、幼稚園の数も合わせるとかなりの数なので、令和元年度の107施設と考えると、大多数の施設で協力が得られているという状況では必ずしもない。これをもっと

増やしていくことができれば、結果として、もっといい結果につながるのではないかとと思うがどうお考えなのか。

子ども図書館長／私立幼稚園や保育所は教育委員会が直接介入していない部分もあり、子ども家庭局や保健福祉局が大きく関わってきているため、各局としっかり連携を取りながら、協力いただける施設を増やしていきたいと考えている。

大坪委員／GIGA スクールのことを前提としながら、その活動変化で計画を立てているようだが、具体的に「1人1台のタブレット端末」となった時に、次期子ども読書プランでは、どういったことを計画し、活用していこうとしているのか、具体的な計画などがわかれば教えていただきたい。

また、3つの方向性の中の2つ目として、「読書の大切さを知る子どもを増やす」という点で、読書が大好きな子どものコアファンを増やすという方向性を出している点は、素晴らしいことだと思っている。低学年から高学年まで、子どもの年齢も幅広くあるように、かつ読書がどうしても魅力的に感じない子どももいれば、働きかけによっては、すごく好きになってくださる子どももいる。

そういう中で、子どもの特性に応じて、「読書が好きな子どもの読書活動もさらに刺激していきましょう」というような形で、適応型の対応を取られているところがとても素晴らしいと思った。

しかし、その成果指標の中の2つ目で「放課後や休日等に学校図書館や地域の図書館を全く利用しない児童生徒の割合」という部分から、図書館を利用しない子どもをターゲットにしようとしているように読み取ったが、これは全く逆の方向の指標になるのではないだろうか。

どちらでもない、いわゆる「真ん中」の子どもがいると思うので、この「放課後、休日等に全く利用しない児童生徒の割合」というのは、ここには馴染まないのではないかと思います、意見を述べさせていただいた。

子ども図書館長／GIGA スクールのタブレットについては、実際に取り組んでいこうと思っていることとして、1人1台タブレットが配られることをきっかけに、電子図書館を活用していただきたいと考えている。

1人1台のタブレット端末があれば、気軽に電子図書館、ウェブの電子図書館に入っていけるようになり、読書に身近に触れられるきっかけとなっていくと思っている。

さらに、電子図書館のウェブ上に、北九州市が発行している書籍や児童書など、児童に関するコンテンツも載せられるようになっているため、そういった形からも学習支援につなげていきたいと思っている。まずは、電子図書館を積極的に活用していけるように1人1台タブレット端末のメリットを生かしていきたい。

平野委員／まず率直な感想を言うと、前回の概要版と見比べて、大変ブラッシュアップされているなど強く感じた。

具体的には、先ほど、指標の在り方について指摘もあったが、きちんと成果指標が示されている点である。それも代表的なものを数を限定し、目指していこうとしている点はよいと思う。

そこには当然、裏付けとなる数値目標などがあるのではないかと思う。その辺は、ずいぶんと概要版と素案がよりよいものとなってきているなど率直に感じた。

しかし、1つ気になる点があるのでお聞きしたい。「ミッション」のところに、大きく3つの方向性で成果指標を出しているが、アクションプランは場所別の施策を打ち出している。

私としては、市民などの外向けに出しているのであれば、少しわかりにくいのではないかと感じた。

アクションプランで主要施策を打ったものが、成果指標の何につながるのかということを確認に紐付けしていかないと、うまくいかない可能性が出てくるのではないだろうか。

無駄ではないのかもしれないが、「せっかく挙げた成果指標に関係なくなってしまう」ということにならないようにするためには、どのように工夫をされているのかということをお聞きしたい。

また、資料の構成についてだが、資料2の部分と4ページの「3 本市の子ども読書活動の課題」の2つはつながっているのではないかと思います。

ただ今回のこのまとめ方は、まず成果から入って、そのあと、また課題を挙げるという構成となっているので、この部分はよく整理をしないと誤解を招くのではないだろうか。

「これについては、やったけど、やはり方向性を間違えていたので、違う施策を打とう」といった形でつながっていると思う。私がこの資料を見ていてつながらなかったところがあったため、指摘させていただいた。

そこについて、直すことができるのならば、そういったところは同じ言葉を使ったり、項目を合わせるなどするとよいのではないだろうか。

特に、前計画の成果は数字に現れてきている。しかし、この数字に対する評価が一切ない。先ほど、津田委員がおっしゃったことと同じである。

要は、「何項のうち何項することで、これは自分たちの目標達成だ」となったかということが全く分からない。

取り組んできたことに対してきちんと評価していかないと、絶対に次につながらない。その部分は教育委員会としての評価を記載していくべきである。

おそらくこの4ページにある不読率、そのあとの読書習慣の数字などが分かりやすい指標になると思う。

この辺をどうやったら改善できるのか、今後の大きな指標になろうかと思うので、何かこの辺の話と、最初にある概要版の3つの方向性の部分と関連させてつなげていくと、より良い資料となると思う。

質問に戻るが、3つの方向性やアクションプランを、どうやって今後結び付けていこうとされているのか、これについて、再度お聞かせいただきたい。

子ども図書館長／この部分については、実は、子ども読書推進会議の中でも今の意見と似たような意見を多くいただいた。

ただ、ご理解いただきたいのは、「主体となるのがどことなるのか」ということを明確にしておいたほうが、アクションを起こす上で、より分かりやすいという観点から、このようにまとめさせていただいたところである。

もちろん、それぞれがバラバラにならないように子ども図書館がそれぞれの5つの観点をグリップしながら、その進捗状況などを確認していく考えである。

それから、成果と課題についてだが、成果については、まず施策ごとにしていくので、一つ一つの課題がどの施策のものに関係するものかは、評価を改めてい

けば、成果と課題がきちんと結び付いていくのではないかと考えており、ここについては整理していきたいと思う。

それから、数値の面についてだが、なかなか、それぞれの施策が教育委員会だけではないということもあり、全項揃えるというのは正直なところ厳しい状況があると思われる。

今のところ、各関連部署と連携を行い、ここに反映させているという現状であるため、改めて各関連部署と確認しながら、直せるところは直していきたい。

平野委員／私としては、この報告書は以前に比べて大きく進化していると思っている。今質問したようなところなどを留意しながら進めていけば、より明確な施策が打ちやすくなるのではないかとと思うので、目的は何かということを一箇一箇捉まえながら、施策を推進いただきたい。

津田委員／素案の中にも「読書の大切さを知る子どもを増やす」の成果指標として、「子ども司書」と「ジュニアサポーター数」という言葉が出てくる。

この部分に着目して素案を見ると、サポーターの数は、例えば「読み聞かせボランティアのバンクからの派遣」は、80から160程度とおおよそ倍に上がっているわけだが、ジュニアサポーターの数はあまり上がっていないように見受けられる。

私は現場を知らないのですが、そう見えてしまうのかもしれないが、この「認定証を授与する」の部分は、累積数なのか。累積であれば単年度70人だとすると、どんどん増えていくのではないかとと思うが、その辺りについて、説明いただきたい。

子ども図書館長／この数字については、累積ではなく単年度の数である。

津田委員／それでは、この新たな目標の70というのは、「単年度の認定証は70名」だということか。

子ども図書館長／そのとおりである。

この事業は始めたばかりで、今年度、大きく進めたいと考えていた。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、長時間子どもたちを集めるというわけにはいかず子どもの図書館講座を、短縮版で行ったところである。

実際に応募してきた子どもたちの中には、昨年度も応募していた子どもも何人かいる。

そういった本当に本の好きな子どもが「もう1回行ってみたい」という気持ちで申し込んでいると考えているため、本資料の数値も単純な数ではないと分析している。

津田委員／素案の5ページには、10分間読書に取り組む学校が減少傾向であると記載がある。

本を読むということは非常に大事だが、10分間読書に取り組む学校は減っていくという現状があるように思う。

学校現場が忙しすぎて、なかなか取り組むのが大変だということなのか。

子ども図書館長／確かに委員がおっしゃっていることが現状である。

こういった要望をいろんな方々からいただく中で、まずお伝えしたいのは、学習指導要領の改訂で英語が入ってきたということである。

どういうことかということ小学校は時間割が詰まっている状態でこれ以上の科目などはコマに入りきれない。そうなってくると、授業時間以外の時間、例えば朝

自習に15分間などと散らばせて対応していくほかない。読書の時間が到底取れないという学校が非常に増えてきている。

とはいえ、校長の考え方によって「読書は大切だ」ということで、徹底して行っている学校も実際にある。

そういった、学校によってのバラつきがあるため、こういったプランを改訂していくことで、我々教育委員会としても、学校に働きかけて、「本当に読書は大切なんだ」ということを訴えていきたい。ひいては少しでもこの数値を上げていきたいと考えているところである。

竹本委員／単純な確認となってしまうが、5ページの「市立図書館における子ども1人あたりの貸出冊数」というのは、1回当たりなのか、月平均なのか。どのようにみたらよいのか、教えていただきたい。

中央図書館庶務課長／この部分は年間の数値である。

竹本委員／そうすると「子ども」というのは利用者だけではなく、市全体の子どもで見た時の数値ということか。

中央図書館庶務課長／実際に借りている子どもである。

竹本委員／ということは、実際に利用している子どもが、年間でだいたいこの冊数を借りているということか。

中央図書館庶務課長／そのとおりである。

竹本委員／承知した。

今回、こういったことに関する数値というのを見させていただいたが、子どもの読書活動ということで、子どものこういった数値化が示されている意味は理解できるのだが、やはり概要にもあるように、読書好きな「大人・家庭」を増やす取組みを展開することが、「子ども」の読書好きに直結するのではないかと強く思っている。

そのため、実際の大人の読書の実態というの、ある程度分かるような指標があれば、「これだけ大人は読んでいるのに、子どもは読んでない」というように分析もできるのではないだろうか。繰り返しになるが、ここは大きくつながってくるのではないかと感じている。

また、「はじめての絵本事業」はとても良い事業だと思っている。1点お聞きしたいのだが、他県で実際に行っている取組みの移動図書館を本市でも検討ができないのか。やはり幼稚園に入るまでの未就園の期間は、どうしても近所にしか出かけていくことができない家庭が多くいらっしゃると思う。そういった時にどこに行くかという、近くの公園であったり、市民センターがほとんどである。

実際に私もそういった時には、図書館に行くには、交通手段もなく、足を運ぶことが難しかった。そんな時に近くの公園に、月に2回、移動図書館が来ていた。

そうすると、周辺で遊んでいる子どもたちも、「大きいバスが来た」「何か始まるぞ」ということで、遊びの手を止めて、移動図書館に集まってくる。

やはり図書館にわざわざ足を運ぶというのはなかなか難しい家庭にとっても、来てもらえるということは、すごくありがたいと感じていた。もしそういった何か案があるのであれば、ぜひ今後加えていただけたらと思っているが、何かあれば教えていただきたい。

中央図書館奉仕課長／以前、北九州市でも移動図書館を行っていたが、現在、市内約130か所にある市民センター等に「ひまわり文庫」を設置するように変わっていった。こちらは常時、身近なところで本が借りられることができる。

竹本委員／やはり自ら足を運ばなくても本を借りられるという意味で、大きなメリットがあると思う。

好きな方は、ご自身で行かれるが、そうではない人や難しい人もいる。そのため、裾野を広げるという意味や習慣づけとして、小さな時から身近にあればよいのではないだろうか。

親にとっても子どもにとっても日常の一部として、そういった本を借りて読む機会があれば、きっと読書が好きな子どもの育成にもなるのではないかと思っている。移動図書館で子どもたちに読書の習慣や楽しさを教えられるのではないかと思っているので、ぜひ検討いただきたい。

子ども図書館長／委員のおっしゃる趣旨はよく分かる。

移動図書館の代わりというわけではないが、資料の「地域における読書活動の推進」の5番目「子どもが集まる商業・レジャー施設など協力の検討」というところを見ていただきたい。これは、いろんな施設に出向き、図書を紹介するコーナーであったり、読み聞かせをするコーナーなどを設けるように考えている。具体的に決まっているわけではないが、こういったところから、図書館だけでなく、関連施設に出かけて行って、そこで本を紹介したり、図書館を紹介したりして、本や読書について、積極的にPRしていきたい。

それから、読書好きな大人の指標をとということだったが、これを行う場合、学校の協力が不可欠である。

いずれにしても調査することによって、読書について保護者も意識してくると思うので、ぜひやっていきたい。

シャルマ委員／概要資料の「読書の意義」に「言葉の力をつける」「いろいろ体験する」などの記載があるが、読書を「いろいろ体験する」というのはどういったことなのか。

子ども図書館長／確かに少しイメージが掴みにくいと思う。本を読むことによって、追体験を行うという意味合いで「いろいろ体験する」と表現した。

シャルマ委員／今の説明を聞いて理解できたが、説明がないとわかりにくい。

先ほど指標についての話が出ていた「放課後や休日等に学校図書館や地域の図書館を全く利用しない児童生徒の割合」についてだが、一つの解決方法として、例えば、授業の時間中で課題を与え、それが終わった人は読書を行うなど、空いた時間に読書を行うと非常に良いかと思う。

そうすると、昼休みに行っている人もいると思うが、放課後に学校図書館に行くのは難しく、地域の図書館とか学童保育など本を読んでいる人もいるかもしれない。

そのため、もっと幅広く本を読んでいる人は、実際にはいるのではないかと思っている。そう考えると資料2の11ページにある「学校における読書活動の推進」の「①学校図書館・学校図書館職員による利活用の促進」や「②学校図書館と市立図書館との連携強化」がすごく重要だと思う。学校図書館や学校図書館職員が学校全体を考えて、図書館の本をパッケージにして学級に配る。その学級に置かれた本を、隙間時間で子どもたちが目にする。そういうことが、実際、子どもの読書の機会と考えた時にはとても重要だと思う。

それで、「授業に役立つセット」と素案の中にあるが、確かに授業で先生が使うものもいいかもしれないが、例えば、学年に合った物語の本をセットにして「学級文庫」とすれば、子どもたちも手に取りやすいのではないかと思う。

実際、そうしている学校も今まで見たことがあるので、そういった手に取りやすくなる取り組みや工夫が大事だと思う。それを子ども図書館で、積極的に推進していただくと、より子どもたちに届きやすいかなと思っている。

もう1つ、同じく資料の10ページの「②保護者による読み聞かせの実施」についてだが、私が教育委員となった初めのころは、母子健康手帳の交付時に絵本を配布していなかった。

実際に配布率が少なかったため、教育委員会会議にて「母子健康手帳の交付時に一緒に配布すれば、もっと効果が上がるのではないか」といった結論になり、そのように変わったと記憶している。

こういったケースのように教育委員会から発信して、各局に働きかけていくやり方もあると思う。

「子どもに読んで聞かせる」ということは、ただ読むのとは効果が大きく違ってくる。本を身近に感じる取組みとして、母子健康手帳時に読み聞かせを実施できたらいいと思うが、母子健康手帳の交付時は他の連絡事項が多くあるため、結果としてはできなかったと聞いている。

もし可能であれば、交付時に短い絵本でも読み聞かせしてもらって体験ができるようになればいいと思っている。

読書が好きな大人がいる家庭は、きっとその子どもも読書が好きになると思うし、それが乳幼児期であれば尚更ではないだろうか。

もちろん、学齢期に読書に出会って好きになる人もいると思うが、その乳幼児期がとても大事だと思う。

そう考えると、これから親になる人に、どのように働きかけられるのか、あるいは、幼稚園や保育園に行っている子どもの保護者に、どのように子どもと読書活動を家庭でできるのか。年齢的に教育委員会の所管ではないが、そこはとても重要だと思うので、他局と協力して「読書好きの子ども」になっていくベースを作っていただき、学齢期での読書環境を充実させ、そして、またその人たちが大人になった時に「読書好きの大人」になる、そういう取組みにしていきたい。

子ども図書館長／子ども読書推進会議の委員の皆様からも、「学齢期ではもう遅い。やはり、乳幼児期からしっかり読み聞かせをすることが大切なんだ」といった意見をたくさんいただいた。

それを受け、シャルマ委員がおっしゃるように、やはり保健福祉局などと連携して、読み聞かせ教室をしたり、参加者を募ることはできると思うので、どのような形でできるのか、今後検討していきたい。

指導部長／確かに小学校では、学級文庫などいくつかの取組みを行っている状況である。

実は我々も、不読率については課題意識を持っており、特に中学校で不読率が高いという現状がある。

そのため、研究の一環として「よく読んでいる学校はどのような取組みをしているか」ということで、学校を訪問している。そういった学校では、やはりシャルマ委員がおっしゃるとおり、身近に本がある環境となっている。

机の中や教室の棚に本が置いてあるため、隙間時間などで読むことができる環境が整っており、そういった学校は、やはり不読率が低いという状況がある。そういった好事例を今後、子ども図書館と連携しながら、各学校に広げていきたいと考えている。

平野委員／今のデジタル社会における「読書の在り方」を再提起していかないといけない時期に入ったのではないかと、今回の協議を聞いて思った。

ご案内のとおり、スマホ・パソコンが目の前にあり、学校にもタブレットが入った、こんな時代でもある。

その資料の中で気になる点があった。資料2の10ページ「4 家庭における読書活動の推進」の中に、「読み聞かせ、家読に加え、時代に対応した動画など」という部分である。ここの「時代に対応した動画」というところは読書ではないのではないか。このままの文言では市民は混乱するような気がする。

そのため、先ほども少し出ていたと思うが、「いろんな体験をする」というのは「いながらにして手軽に、本を読むことでいろんな体験ができる」という意味合いだろうと思う。

そのようなところもあるため、さらに掘り下げて、「読書でしかできないものは何なのか」というところをきちんと伝えることによって、「本を読まないとうとうと困ったり、将来に影響が出るんだ」ということを、きちんと学んでもらうために説明する必要があると思っている。「本を読まないダメだ」と言うだけではなかなか浸透しない。

私としては「何が疎遠になっているか」というところを考えるべきだと思う。

今の時代は動画やビデオ、ゲームが身近にあり、いかに読書というものが、それらに比べて効果があるんだということを、1つのセールスポイントとして出していくことが大切ではないだろうか。

もう1つ、私の経験上、読書によって目から入ってきた情報のほうがより頭に残ると思っている。例えば、ビジネス文書や手紙を書こうと思うと、やはり、有名な作家が書いた書物を読むと、とても参考になる。

こういうデジタル化が進む時代の中で、ずいぶん環境が変わってきているので、「読書でしかできないものは何なのか」というところをもう少し掘り下げて、「こういった理由、効果があるから読書は大切なんだ」ということをどこかに織り込めるといいんじゃないかと思う。ぜひご検討いただきたい。

子ども図書館長／今、委員にご指摘いただいた部分については、少し表現の仕方を工夫したいと思う。実際、動画というのは読み聞かせの動画の配信であるとか、ホームページ上に載せるなどを想定しており、動画そのもの、例えばアニメなどを推奨するという意味ではない。誤解の無いよう表現を改めたい。

津田委員／資料2の3ページに「子育て関連施設における子どもの読書活動の推進」という項目があり、「子育て関連施設における市立図書館からの貸出文庫登録施設数」が、67施設から71施設に増えている。

市民センターと子育て関連施設は別にして、表現されているようだが、この子育て関連施設とは、別のページで言うと「子ども食堂」なども入れてあるように見受けられる。放課後児童クラブなどの子育て関連施設が67という数値の分母に当たるような施設数というのはどういったもので、約何施設ぐらいを想定しているのか、教えていただきたい。

中央図書館奉仕課長／ここで言う「子育て関連施設」は、現在、既に市立図書館が「団体貸出文庫」として本を一定期間貸し出しているところであり、保育園、児童館、放課後児童クラブ、幼稚園、そういったものを含めて、現状、平成27年が67施設だったところが、令和元年で71施設にまで増えたということである。

そのため、分母は今のところ、どれぐらいあるかというのは把握していない。

津田委員／実際は分母のほうがかなり数が増える可能性があるが、そういったことをやっている貸館側の能力等もあってのことと読んでいいのか。

中央図書館奉仕課長／そういった機会をできる限り増やしていくようにしているが、中には、施設独自で文庫を設置するところもある。

もちろん増えるほうがよいのだが、必ずしも少なくなったからと言って、それが読書につながっていないという見方はできないかと思っている。

津田委員／そうであるのならば、こういった数値が増えただけでなく、評価の仕方になると思うが、その評価をするところで説明書きを書いていただくと読みやすくなると思った。

協 議 終 了

4 閉 会

16:40 田島教育長が閉会を宣言